

発刊に寄せて

超音波検査は診察の延長線上にある検査手技であり、検体検査や他の画像診断と異なり患者さんと対話しながら行う必要がありますが、問診や通常の診察では得られなかった情報をベッドサイドでリアルタイムに得ることができます。そのため身体診察に超音波検査を追加するPoint-of-Care超音波（POCUS）といった新たな活用法も提唱されています。一方で、最近では医師の超音波検査離れが顕著となり、救急外来では単純CTによる全身スクリーニングが多用される傾向にあるのも日本の現状です。

超音波検査を習得するには、腹部臓器の解剖や画像所見といった医学知識のみならず、プローブや観測装置の操作といった実習も必要であり、この両者は超音波検査の診断能にも大きく影響します。則ち、教科書や講習会で腹部領域の解剖や代表的な疾患を学ぶことも重要ですが、実際にプローブを用いた実習を行わなければ超音波検査の習得はできません。残念ながら超音波検査を指導できる医師は少なく、施設ごとに研修医や検査技師さんに指導を行うことは現実的には不可能です。

そこで、少しでも実践的なことが学べるように2008年から通常の講演（座学）にライブデモンストレーションやハンズオンといった体験型の指導を組合わせた講習会を全国各地で行ってきました。講演のみの研修会よりも実践的な内容となったため、受講者からも好意的なコメントをいただけるようになり、最近ではいろいろな学会、研究会でもライブデモンストレーションやハンズオンをとり入れるようになってきました。

本書は、研修医の先生と初級から中級の検査技師の皆さんを主なターゲットとしており、今まで全国で行ってきた教育講演、ライブデモンストレーション、ハンズオンなどの経験と参加者からのアンケートなどをもとに、超音波解剖と領域別の走査法の習得をキーワードとして作成しています。

超音波解剖については、3DCT画像で再合成した大血管（大動脈・下大静脈・門脈）および主要分枝と腹部臓器の位置関係を動画で提示し、領域別の走査法についても解剖の項で学んだ大血管とその主要分枝を指標とした描出法の動画と解説を提示しています。本来であれば実際にハンズオンでプローブの操作法を教える方法が最も有効と考えますが、くり返し超音波解剖と走査法の動画を見ることによりある程度独学で患者さんから情報が引き出せるようになり、超音波検査の魅力（面白さ）と難しさ（怖さ）を体験できると思います。

本書の後半では、臓器別の観察のポイントと走査のコツに加え、代表的な超音波画像所見についても解説しているので、超音波検査を総合的に習得できるものと自負しております。この書籍が研修医や検査技師の皆さんに超音波検査に興味をもっていただける契機となり、多くの疾患がより早期に発見されるようになることを期待しています。

最後に、本書の刊行にあたりご苦勞をおかけし辛抱強く対応していただいた大家有紀子氏、藤澤優氏に謝意をあらわし、長年にわたり私に超音波検査の魅力と教育の重要性をご指導いただいた故竹原靖明先生に本書を捧げます。

2023年3月

飯田市立病院消化器内科
岡庭信司